甲第109号証

死の淵を見た男

吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日

門田隆将
RYUSHO KADOTA

吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日

“あの時”を風化させてはならない。

吉田昌郎の「遺言」は私たちに何を問いかけるのか。

PHP
定価：本体1,700円（税別）

第十五章　一緒に「死ぬ」人間とは

近づいてきた「最期」

免震重要棟の緊対室は、悲壮な空気に支配されていた。

すでに事故から四日目。ほとんど睡眠をとることもできず、文字通り、不眠不休の状態でここまで来ていた。だが、ついに事態は、〝最期〟を迎えようとしていた。

この日の午前十一時過ぎに起こった三号機の爆発で、海水注入をおこなっていた頼みの消防車が破壊されてしまったのである。ホースなども損傷し、ついに海水注入による冷却活動がストップしてしまったのだ。それは、致命的な事態だった。

冷却ができないということは、燃料を冷やすための水が蒸発し、燃料棒がむき出しになることを意味する。それは刻一刻と燃料棒が損傷し、メルトダウンが近づいてくることを示していた。

二時間後の午後一時過ぎ、吉田は、放射線量の落ち着きを待って現場確認を指示した。これ以上の時間の経過は許されない。意を決して、凄まじい破壊の跡となった「現場」の調査を命じたのだ。それは予想以上の被害だったが、わずかな〝朗報〟もあった。

原子炉建屋近くの消防車は、運転不能となっていたが、そこから離れた海側の「物揚場（ものあげば）」の消防車が二台、無事だったことがわかったのだ。これは、海から海水を吸い上げ、そこから逆洗弁ピットに海水の補給をおこなっていた消防車である。

これが辛うじて運転可能なことがわかった。

ただちに、その消防車を使って、物揚場から直接、海水を送る指示が吉田から発せられた。

ズタズタになっていたホースを交換して、この消防車によって注水が「再開」されたのは、午後三時半を過ぎた頃である。

だが、最大の危機を迎えていたのは、「二号機」だった。三号機爆発のタイミングで二号機

じたのだ。それは予想以上の被害だったが、わずかな〝朗報〟もあった。

原子炉建屋近くの消防車は、運転不能となっていたが、そこから離れた海側の「物揚場（ものあげば）」の消防車が二台、無事だったことがわかったのだ。これは、海から海水を吸い上げ、そこから逆洗弁ピットに海水の補給をおこなっていた消防車である。

これが辛うじて運転可能なことがわかった。

ただちに、その消防車を使って、物揚場から直接、海水を送る指示が吉田から発せられた。

ズタズタになっていたホースを交換して、この消防車によって注水が「再開」されたのは、午後三時半を過ぎた頃である。

だが、最大の危機を迎えていたのは、「二号機」だった。三号機爆発のタイミングで二号機のＲＣＩＣが止まり、炉内の圧力が上昇し始めたのである。水位も徐々に低下していく。消防車を通じて海水注入をおこなおうとするが、すでに中の圧力が高くて入らなかった。

「水が入りません！」

もはや、中で完全に燃料棒が露出していることは、間違いなかった。

「要するに、セーフティー・リリーフ・バルブという〝逃がし安全弁〟が開かないから二号機の圧力が落ちないんですよ。中の圧力が一平方センチあたり一〇キログラムの圧力より下がらないと、消防車の押し込み圧力が勝つことができず、水が入っていかないわけです。水がそこで〝止まっている〟だけですよ。その圧を抜くためのバルブがちゃんと動かなくて、それで時間だけとって、圧が抜けなかったんです」

吉田所長は、そう振り返った。

「電源にバッテリーを利用して中操からの操作で弁を開けっていうことなんですよ。常に閉じているバルブを強制的に開く。ところが、これも電源だとか、シリンダーにエアーを注入してやるエアー源とかがうまくいかないと開かないんですよ。バルブが複数個あって、一個一個トライしていくんですけど、なかなか開かない。原子炉の圧力は高いままですから、ここで見ていると、これは水が絶対入らないっていうのはわかるわけですよね」

所内でコンプレッサーまで探し出して〝空気圧〟を送ろうとした方法が、なかなか功を奏さなかったのである。だが、あきらめるわけにはいかなかった。これが成功しなければ、二号機の格納容器の爆発が起きる可能性が高まってくることを示している。

それは、すなわち「最期」を意味する。

「これは恐ろしい事態ですよ。今までの中でも最悪です。いよいよそういう状態になるというぎりぎりが来ていました」

吉田はそう語った。緊対室の緊張はいやが上にも高まっていた。現場の状況報告が滞りがちになった時、吉田の叱責が飛んだ。

「確認だ。確認！」

吉田の指示に、

「……のはずです」

そんな報告が来ることもあった。

「〝はず〟じゃねぇ、バカ野郎！」

さらには、

「おまえ、〝はず〟で動くか、バカ野郎！」

そんな吉田の怒声が緊対室で飛んだ。

「僕もね、本当に腰がもう抜けかけたところがあって、逆に最悪を考えるから腰抜けるんだけどね。ほかの人はどう思ってたか、よくわからないんだけど、本当のプロであれば、たぶんみんな腰が抜けていいんじゃないかと思うんですけどね」

丸三日以上、吉田は、ほとんど寝ずに活動をつづけている。現場の人間は時折、交代で身体を横たえていたかもしれないが、それでも〝不眠不休〟には変わりなかった。

「現場はすごいと思いましたよ。よくあの時に、水を入れに行ったりですね、消防車に燃料補

「……のはずです」
そんな報告が来ることもあった。
「〝はず〟じゃねぇ、バカ野郎！」
さらには、
「おまえ、〝はず〟で動くか、バカ野郎！」
そんな吉田の怒声が緊対室で飛んだ。
「僕もね、本当に腰がもう抜けかけたところがあって、逆に最悪を考えるから腰抜けるんだけどね。ほかの人はどう思ってたか、よくわからないんだけど、本当のプロであれば、たぶんみんな腰が抜けていいんじゃないかと思うんですけどね」
丸三日以上、吉田は、ほとんど寝ずに活動をつづけている。現場の人間は時折、交代で身体を横たえていたかもしれないが、それでも〝不眠不休〟には変わりなかった。
「現場はすごいと思いましたよ。よくあの時に、水を入れに行ったりですね、消防車に燃料補給に行ったり、やりつづけてくれたと思いますよ」
三号機の爆発で「四十名行方不明」という一報から引き続いた事態に、吉田の体力はすでに限界を告げていた。
午後六時二分、緊対室に「減圧開始！」という声が飛んだ。
（圧力が下がり始めた！）
そのデータコールがあった時のことは、緊対室にいた人間は忘れられないだろう。
きっと天の助けに違いない。吉田は、そう思った。午後七時五十四分には、ショット（水）も入り始める。
だが、本当に弁が開いて圧力が下がり、水が入っているのか、あるいはそうではないのか、確認しなければならなかった。
計器だって信用できない状態ですから、と吉田は言う。

「すぐに私は消防車の脇にいる人間に、水が流れてるかどうか確認させました。一生懸命がんばっても、弁が開いてないと、流れないじゃないですか。要は、流れていく感覚があるかないかです。だから、消防車の流量計を見させ、それからちゃんと手で触わった感覚で水が流れているかどうか、ホースで確かめさせました」

水が流れると、ホースは脈打つ。どくどくとホースの中を水が流れて行く感じが、外からでもわかるものである。吉田は、それを確認させようとしたのである。

「とにかく消防車の流量計と、水が流れてる感覚の両方で確認してくれって指示したんですよ。しばらくしたら、〝流量計がちゃんと立っています！〟というのと〝流れている感覚があります〟という二つが報告されました。ホッとしましたよ。なにしろホッとした……」

現場の線量が高いため、現場にいる時間は、できるだけ「短く」しなければならない。

「被曝を少しでも避けるために、ちょっと離れた小屋の脇に（作業員は）退避してるんです。なかなか通じないんですが、そこにトランシーバーで指示するんです。それを通じて、そういう報告が来ましたね」

ぎりぎりの場面だっただけに、緊対室に拍手が湧き起ったことを吉田は記憶している。

しかし無情にも、その安堵も長くはつづかなかった。

思い浮かべた仲間の顔

原子炉建屋からおよそ九百メートル離れた正門付近で、「毎時５００マイクロシーベルト」の放射線量が計測されるのは、午後九時三十五分頃のことだった。

一度は、下がり始めたはずの二号機の格納容器圧力が、ふたたび上昇に転じていた。それは、気まぐれな原子炉が、あたかも人間を弄（もてあそ）んでいるかのようだった。

午後十時五十分、東京本店では、記者たちに二号機の格納容器の圧力が異常上昇したことで、原災法一五条に基づく通報がなされたことが発表された。現場の必死の作業にもかかわらず、圧力は低下せず、厳しい状況がつづいていた。

すでに円卓に座る幹部たちの体力は、限界を超えている。午後十一時四十六分、ついに二号機の格納容器圧力は、設計圧力の二倍を、「７５０キロパスカル」まで上昇し、つづいて「可燃

思い浮かべた仲間の顔

原子炉建屋からおよそ九百メートル離れた正門付近で、「毎時５００マイクロシーベルト」の放射線量が計測されるのは、午後九時三十五分頃のことだった。

一度は、下がり始めたはずの二号機の格納容器圧力が、ふたたび上昇に転じていた。それは、気まぐれな原子炉が、あたかも人間を弄（もてあそ）んでいるかのようだった。

午後十時五十分、東京本店では、記者たちに二号機の格納容器の圧力が異常上昇したことで、原災法一五条に基づく通報がなされたことが発表された。現場の必死の作業にもかかわらず、圧力は低下せず、厳しい状況がつづいていた。

すでに円卓に座る幹部たちの体力は、限界を超えている。午後十一時四十六分、ついに二号機の格納容器圧力は、設計圧力の二倍近い「７５０キロパスカル」まで上昇し、いつ「何が」起こってもおかしくない状態になっていった。

実は、二号機のベント操作は前日の十三日朝からおこなわれ、この段階では、まだ一号機のような高線量の状況ではなかったためにＭＯ弁は手動で開けられ、ＡＯ弁も外部からのエア注入によって、いったんは開いていた。しかし、三号機の爆発の影響と思われる電気回路の不調で弁が閉じ、必死の復旧操作にもかかわらず、ふたたび開くことはなかったのである。

一進一退がつづいていた。だが、それは、いよいよ〝最期〟に向かう一進一退ではないだろうか。口には出さずとも、幹部たちはそのことを悟っていた。

吉田は、格納容器爆発という最悪の事態に備えて、協力企業の人たちに、帰ってもらおうと思った。

「皆さん、今やっている作業に直接、かかわりのない方は、いったんお帰りいただいて結構です。本当に今までありがとうございました」

緊対室の廊下に出た吉田は大声でそう叫んだ。
廊下には、多くの人間が身体を横たえている。ほとんどが、タイベックを着たまま泥のように眠っているのである。膝を抱えて座っている者、壁にもたれたままの人間、小さなスペースを見つけて深い眠りに落ちている者……それは、〝野戦病院〟そのものだった。
彼らが、突然の吉田の言葉に驚き、そして、耳を傾けた。
最期が近づいていることを誰もが肝に銘じた。免震重要棟から一歩外へ出るということは、放射能汚染の中に「出ていく」ということである。しかし、その危険を冒してでも、今は、ここから「離れる」ことのほうが重要だったのである。
「本当にありがとうございました」
協力企業の人たちに頭を下げる吉田の姿を見て、復旧に全力を尽くす社員たちもいよいよ最期が近づいていることを知った。
朝方の何時だっただろうか。午前四時、いや五時を過ぎていたかもしれない。
席に戻り、しばらく経った時、吉田のようすがおかしいことに何人もが気づいた。顔から精気が失われ、どこか虚ろな表情をしている。明らかにこれまでと雰囲気が違う。
ふいに吉田が、座っている椅子をうしろに引いて、立ち上がった。それは、〝ゆらりと〟立ったように見えた。
身長百八十四センチ、体重八十三キロという吉田が、幽霊のように立ち上がったかと思うと、今度は、テーブルを背にして、椅子と机の間にできたスペースにそのまま胡坐をかいて座りこんだ。

そして、ゆっくりと頭を垂れたのだ。吉田は、目をつむったまま微動だにしなかった。手は、長い脚が交差している部分を包み込むように置かれている。見ようによっては、それは座禅を組んでいるようにも思えた。
（もう、終わりだ……）
周囲の人間には、そのことがわかった。誰も言葉を発しない。黙って吉田の姿を見ている。事態の深刻さを緊対室に詰める誰もに悟らせるシーンだった。
その吉田の姿は、「最期の時」が来たことを全身全霊で周囲に示していた。

と、今度は、テーブルを背にして、椅子と机の間にできたスペースにそのまま胡坐をかいて座りこんだ。

そして、ゆっくりと頭を垂れたのだ。吉田は、目をつむったまま微動だにしなかった。手は、長い脚が交差している部分を包み込むように置かれている。見ようによっては、それは座禅を組んでいるようにも思えた。

（もう、終わりだ……）

周囲の人間には、そのことがわかった。誰も言葉を発しない。黙って吉田の姿を見ている。事態の深刻さを緊対室に詰める誰もに悟らせるシーンだった。

その吉田の姿は、「最期の時」が来たことを身体全体で周囲に伝えていた。

この時、まっさきにその〝異変〟に気づいたのは、吉田の背中側の席にいた企画広報グループの猪狩典子（五一）である。

「あの時、もう最期だと思いました。それまで席に座っていた吉田さんが突然、立ちあがったかと思うと、机の下にそのまま〝胡坐〟をかくように座ったんです。吉田さんは、しばらく頭を下にして、目をつむっていました。私は、ああ、（プラントが）もうダメなんだ、と思いました」

猪狩は、技術者でもなければ、プラントの専門家でもない。プラントの状態は頭で理解しているつもりでも、実際のところはわからない。

三分、五分、十分……その状態はつづいた。猪狩は、吉田のようすを黙って見ていた。企画広報グループの猪狩の席は、吉田とわずか五メートルほどしか離れていない。地震発生以来、どれほど疲れていても、その素振りすら見せなかった吉田に「限界」が来たことを見せつけるものだった。

しかし、この時、吉田は、頭を垂れながら、あることを考えていた。
「私はあの時、自分と一緒に〝死んでくれる〟人間の顔を思い浮かべていたんです」
吉田は、その場面をこう回想した。
「その時、もう完全にダメだと思ったんですよ。椅子に座っていられなくてね。椅子をどけて、机の下で、座禅じゃないけど、胡坐をかいて机に背中を向けて座ったんです。終わりだっていうか、あとはもう、それこそ神様、仏様に任せるしかねぇっていうのがあってね」
それは、吉田にとって極限の場面だった。吉田は何を思ったのか。
「何人を残して、どうしようかというのを、その時に考えましたよね。ひとりひとりの顔を思い浮かべてね。私は、東電に入社してから、福島第一は長いんですよ。若い時から何度も勤務しているし、あわせると十年以上、ここで働いていますからね。若い時から、一緒にやってきた仲間が結構いるんですよ」
吉田は、そのひとりひとりの顔を思い浮かべたというのである。
「最期はどういう形で現場の連中と折り合いっちゅうか、そういうものをつけるか、ということです。それは、プラントとの折り合いをどうつけるかという意味でもあります。それから、水を入れ続ける人間は何人ぐらいにするか、誰と誰に頼むかとか、いろいろなことがありました。極論すれば、私自身はもう、どんな状態になっても、ここを離れられないと思ってますからね。その私と一緒に死んでくれる人間の顔を思い浮かべたわけです。これは、発電班の連中よりも、特に復旧班なんですよ、水を入れたりする復旧班とか、消火班とかですね。もうここまで来ると、そっち側の仕事になるんですよ。私、福島第一の保修部門では、三十代の初めから働いてますからね、一緒に働いた連中、山ほどいますから、次々、顔が浮かんできました」
最初に浮かんだのは、同い年の復旧班の班長の顔だった。
「復旧班長って二人いるんだけど、そのうちの一人なんですけどね。これはもう、本当に私と同い年なんですよ、昔からいろんなことを一緒にやってきましたからね。こいつは一緒に死んでくれるだろうな、って最初に浮かんできたですね」
こいつなら一緒に死んでくれる、こいつも死んでくれるだろう、と、それぞれの顔を吉田は思い浮かべていた。「死」という言葉が何度も吉田の口から出た。

ら働いてますからね、一緒に働いた連中、山ほどいますから、次々、顔が浮かんできました」

最初に浮かんだのは、同い年の復旧班の班長の顔だった。

「復旧班長って二人いるんだけど、そのうちの一人なんですけどね。これはもう、本当に私と同い年なんですよ、昔からいろんなことを一緒にやってきましたからね。こいつは一緒に死んでくれるだろうな、って最初に浮かんできたですね」

こいつなら一緒に死んでくれる、こいつも死んでくれるだろう、と、それぞれの顔を吉田は思い浮かべていた。「死」という言葉が何度も吉田の口から出た。

「やっぱり、一緒に若い時からやってきた自分と同じような年嵩の連中の顔が、次々と浮かんできてね。頭の中では、死なしたらかわいそうだ、と一方では思っているんですが、だけど、どうしようもねぇよなと。ここまできたら、水を入れ続けるしかねぇんだから。最後はもう、(生きることを)諦めてもらうしかねぇのかなと、そんなことをずっと頭の中で考えていました」

吉田には、どれほどの時間、そこに座っていたのか、記憶がない。

「座ったまま、どのくらい考えていたのか、わからないんですよ。見当もつきません。時間については、ほとんど記憶にないんですよ。それで、もうしょうがねぇと腹決めて、あとはデータを待つしかないんですよ。データが改善されるのを待つしかない。それが報告されなければ、腹決めて、最期まで復旧の活動をやって、それで死ぬほかなかったですね」

「死」を覚悟した吉田の頭には、やはり若い時から長い間、一緒にやってきた肝胆相照らす仲間の顔が浮かんだのだった。

猪狩が言う。

「吉田さんはそのあと、ごろんと横になったんです。はっと思いました。ああ、吉田さんもいよいよ、と思いました。吉田さんは、しばらく横になったままでした。私たちには吉田所長だけが頼りでした。吉田さんは気取りのない人というか、素のままの人なんです。見た目も大きいですが、実際に人間として大きい。どんなことがあっても逃げない人で、みんなが頼りきっていました。その吉田さんが、そういう状態になってしまったんです。私は、もうダメなんだと思ってしまいました。うちの企画広報の人間が机の下で倒れている吉田さんに〝しっかりしてください。大丈夫ですか〟と声をかけて起こしたのは、三十分ぐらい経ってからだったと思います」

それは、「日本」を守るために闘う男のぎりぎりの姿だった。

第十六章　官邸の驚愕と怒り

「えっ、全員撤退？」

第十六章　官邸の驚愕と怒り

「えっ、全員撤退？」

二号機がやっと落ち着き始めたという情報を得た原子力安全委員長の班目春樹は、日付が三月十五日に変わろうとする頃、仮眠をとった。事故発生以来、徹夜がつづくハードな日々に、班目の肉体が悲鳴を上げていた。

ふらふらになった班目は、周囲に休むことを勧められ、同じ原子力安全委員会の久木田（くきた）豊・委員長代理のいた部屋にあったソファで二時間ほど身体を横にしたのである。

だが、班目は午前二時頃、叩き起こされた。ふたたび二号機の圧力が上昇して事態が深刻化し、官邸五階の総理応接室に来るように命じられたのだ。

班目が総理応接室に入っていった時、菅首相はいなかった。枝野官房長官、福山官房副長官海江田経産相、細野首相補佐官、寺田首相補佐官ら政治家と、安井正也（資源エネルギー庁省エネルギー・新エネルギー部長）、伊藤哲朗（内閣危機管理監）といった役所の人間が集まっていた。その場で、班目は枝野と海江田から意見を求められた。

門田
RYUS
1958
部卒。
件、歴
ている
洋の3
はなも
の遺言
『康子
の奇跡
庫）、『
故』（
（第1部
義に挑
（集英

「東京電力が福島第一から全員撤退したいと言っている。どう思うか」
枝野と海江田の表情は険しかった。班目は、そう聞かれた時、「まさか」と思った。
これに先立って枝野、海江田の両大臣は東電の清水正孝社長から電話連絡を受けていた。
二号機が非常に厳しい状況になっており、今後ますます事態が悪化する場合は、退避を考えている――。
清水社長はこの時、そんな内容の報告をおこない、了承を求めている。清水はこの電話で、「制御に必要な人間を除いて」という言葉を使っておらず、二人は、清水の言うことを「全員撤退」と受け止め、さっそく班目を呼び出して、意見を求めたのだ。
班目は驚いた。全員撤退など、あり得るはずはない。それは、原子炉の制御を放棄し、すべてのプラントを〝暴走〟に任せるという意味である。
そんなことが許されるはずがない。もし、全員撤退が本当なら、東京電力は事業者としての責務を完全放棄したことになる。それは「日本」を見捨てるという意味でもある。班目は、驚きと同時に怒りがこみ上げた。
班目は、その場にいた安井部長と共に、意見を述べた。
「一度撤退したら、原発に近寄ることは難しくなります」
「東京電力が撤退した後、自衛隊とか米軍に後始末してもらうなんて、そんなことはあり得ない。最後まで事業者が面倒を見なければいけません」
「免震重要棟というのは、放射線防護のためにきちんとフィルター、換気設備がついてるから、まだ頑張れるはずです」

班目と安井は、そう意見を述べた。彼らは、福島第一原発の免震重要棟に六百人もの人数が残っており、吉田所長がプラント制御に必要な人間を除いて、「福島第二原発に移動」させようとしていることを全く知らない。
そのため「全員撤退はあり得ない」という認識は、その場にいる人間の統一意見となった。
午前三時、総理執務室の奥の応接室のソファで寝ていた菅は、秘書官に起こされた。海江田からの緊急の報告を受けるためである。
「東電から撤退したいという話が来ています。どうしたらよろしいでしょうか」

班目と安井は、そう意見を述べた。彼らは、福島第一原発の免震重要棟に六百人もの人数が残っており、吉田所長がプラント制御に必要な人間を除いて、「福島第二原発に移動」させようとしていることを全く知らない。

そのため「全員撤退はあり得ない」という認識は、その場にいる人間の統一意見となった。

午前三時、総理執務室の奥の応接室のソファで寝ていた菅は、秘書官に起こされた。海江田からの緊急の報告を受けるためである。

「東電から撤退したいという話が来ています。どうしたらよろしいでしょうか」

東電が撤退――？　菅は、突然の報告に仰天した。「撤退」したら、「日本」はどうなるのか。

それまで、最悪の事態が片時も頭から離れたことのなかった菅は、この時のことをこう振り返った。

「私は、事故が起こってから、ずっと最悪の事態を考えてきました。普通の火力発電でも、コンビナートでも、そりゃあ、燃料タンクに火がついたら大変だけど、どこかでは燃え尽きるんだ。そこが原発とは、全然違うんです。ある意味では、一定以上危なくなったら、逃げたっていい。だけど、原発というのは、燃え尽きない。燃え尽きない上に、制御する人がいなくなれば、一つアウトになったら全部がアウトになっていくんだからね。つまり、福島の第一と第二の十の原子炉と十一の核燃料プールが全部アウトになるというのが、私の基礎数字ですよ」

一国の総理が想定した「最悪の事態」とは、どんなものだったのか。

「そもそも格納容器の爆発っていうのは、世界に例がない。チェルノブイリは格納容器のない型ですからね。放置したら、量的にチェルノブイリどころでない、というのが私の認識です。

チェルノブイリの事故は、冷却機能が止まったんじゃなくて、核反応が暴走して、ボンっといってますからね。そして、黒鉛炉だから、火がついて燃えてるわけで、一挙に出たわけですよ。しかし、この福島の第一と第二のすべての原発とプール、つまり十の原発と十一の使用済み燃料プールにある放射性物質の量っていうのは、事故を起こしたチェルノブイリ四号炉の十倍じゃきかないんですよ。そうなった時はどうなるか。その時に日本がどうなるか。私は、ずうっと考えてましたよ」

国家のリーダーとしての孤独を、菅はこう語った。

「あの一週間は、すぐ隣の公邸にも帰らずに、夜も総理執務室の奥の応接室のソファに、防災服のまま毛布をかぶって寝ていました。一人になった時は、こう頭に浮かぶわけですよ。日本はどうなるかな、と。まさに背筋が寒いですよ。チェルノブイリは、結局、軍隊を出して、それで、みんなにセメントを持たせて、放り込んで石棺をつくるわけですよ。それで、相当の人が亡くなっている。軍隊を投入して、相当の犠牲者を出して抑え込んだわけですよね。そういうことは、私も知ってますから、どこまでいくんだ、あそこから逃げたらどうなるんだと、ずっと考えていましたよ」

もし、そういう事態になったら、言うまでもなく首都・東京もやられる。

「当然です。（原子炉を）コントロールできなくなるほど怖いものはない。日本には戒厳令はないし、避難までの時間的な長さも、どの程度になるかわかりません。これは、私もそれまで迂闊に言えなかったですよ。たとえば、それは個人個人の問題にもなるし、その時は陛下も含めて皇室のこともありますからね。だから、撤退問題が起きた三月十五日にそういう議論になった時、私は閣僚なり補佐官の前で初めてそのことを話したんですよ。撤退なんてありえない、逃げたらどうなるかわかってるのか、と。それまでは、あまりにもことが大きすぎて、言葉に出せなかったですよ」

菅は、当時の苦しい胸中をそう振り返った。

「近藤さん（注＝近藤駿介・内閣府原子力委員会委員長）が試算したのは、（避難対象が）二百五十キロですよ。これは、青森を除いて、東北と関東全部と新潟の一部まで入っています。そうなったら、どうなるのか。二百五十キロというのは、人口五千万人ですからね。だから、放置

ないし、避難までの時間的な長さも、どの程度になるかわかりません。これは、私もそれまで迂闊に言えなかったですよ。たとえば、それは個人個人の問題にもなるし、その時は陛下も含めて皇室のこともありますからね。だから、撤退問題が起きた三月十五日にそういう議論になった時、私は閣僚なり補佐官の前で初めてそのことを話したんですよ。撤退なんてありえない、逃げたらどうなるかわかってるのか、と。それまでは、あまりにもことが大きすぎて、言葉に出せなかったですよ」

菅は、当時の苦しい胸中をそう振り返った。

「近藤さん（注＝近藤駿介・内閣府原子力委員会委員長）が試算したのは、（避難対象が）二百五十キロですよ。これは、青森を除いて、東北と関東全部と新潟の一部まで入っています。そうなったら、どうなるのか。二百五十キロというのは、人口五千万人ですからね。だから、放置したら、そういうことになるんだ、と。なんとしても止めなきゃいかん、と思いました。自分自身も含めて、本当の意味で、命を賭けて止めなければならない、と思いましたね」

東電の清水社長が官邸に呼び出されたのは、それから一時間ほどのちの午前四時過ぎのことだ。総理応接室には、菅首相以下、枝野官房長官、海江田経産相、細野補佐官、福山官房副長官ら政治家と班目らが顔を揃えた。

大きな細長いメインテーブルの片側に政治家たちが座り、班目ら専門家や官僚が、それと向かい合う形で席に着いた。菅首相は、両側を見据える位置の上座の席に着いた。

千代田区内幸町にある東電本店は、永田町の首相官邸から一・五キロほどしか離れていない。車を飛ばせば、十分もかからない位置にある。清水が部屋に入って来たのは、メインテーブルに全員が揃って間もなくのことだった。

「東京電力は、福島第一原発から撤退するつもりなのか」

菅は、最初から、そう問い質した。だが、清水の答えは、その席にいた全員を絶句させた。

「撤退など考えていません」
えっ――。撤退するのではないのか。撤退するというから、この夜中に全員が緊急に集まっているのではないのか。誰もが清水を見てそう思っただろう。
「清水さんが席に座って〝撤退など考えていません〟と言った時、かくっと来ました。そして、なんだ、やっぱりそうか、と思ったんです」
班目は、そう語る。
「それまで、私は政治家に全員撤退と聞かされているわけです。私も現場がどれぐらいの線量になってるか、知りません。免震棟のフィルターでどれぐらいまで頑張れるか、わからない。だけど、その後、さらにすごい現象が起こったというのも聞いてないわけだから、何もできない、何もできないと東電が言っているだけじゃないかというふうに思っていたんです。なんで撤退なんだと。おかしいなと思って、問い質そうと思ったの。しかし、清水さんが部屋に入ってきて〝撤退など考えていません〟と言ったのには、本当にびっくりしました。かくっと来て、次に、やっぱり撤退ではなかったのか、と思いました。ほんと撤退などありえないことですからね」
班目は、清水の話に耳を傾けた。
「清水さんは、わりと小さい声で、ボソボソっとしゃべるでしょ。それで〝撤退など考えていません〟と言いましたよ。私は、それまで、撤退などそんなわけないと思いながら、政治家に〝撤退を認めていいのか〟と聞かれていたわけですからね。政治家からああ言われちゃったら、私も東電が本当に完全撤退を考えたのかなと、信じましたよ。私自身が電話を受けたわけじゃないし、電話を受けた複数の政治家にこう言ってると言われたら、信じますよ。でも、東電が政治家に誤解させるようなことを電話したのは確かですからね」
清水社長の説明不足と、報告を受けた政治家の誤解が、のちに国会でも議論される「全員撤退問題」となったのである。班目は、東電をこう批判する。
「私、言っておきますけど、政治家には多分に同情的なんです。だって、専門的なことは政治家にはわからないんですからね。私は官邸にずっと閉じ込められていますから、官邸側と同じような心理状態なんです。それに対して、東京電力や保安院なんかについては、ものすごい不

「清水さんは、わりと小さい声で、ボソボソっとしゃべるでしょ。それで〝撤退など考えていません〟と言いましたよ。私は、それまで、撤退などそんなわけないと思いながら、政治家に〝撤退を認めていいのか〟と聞かれていたわけですからね。政治家からああ言われちゃったら、私も東電が本当に完全撤退を考えたのかなと、信じましたよ。私自身が電話を受けたわけじゃないし、電話を受けた複数の政治家にこう言ってると言われたら、信じますよ。でも、東電が政治家に誤解させるようなことを電話したのは確かですからね」

清水社長の説明不足と、報告を受けた政治家の誤解が、のちに国会でも議論される「全員撤退問題」となったのである。班目は、東電をこう批判する。

「私、言っておきますけど、政治家には多分に同情的なんです。だって、専門的なことは政治家にはわからないんですからね。私は官邸にずっと閉じ込められていますから、官邸側と同じような心理状態なんです。それに対して、東京電力や保安院なんかについては、ものすごい不信感を持ってます。当時、官邸は東京電力をまったく信用していない。なに言ってるんだ、東京電力は、という思いになっていたのは、よくわかりますよ」

この総理執務室の会議で、菅は清水社長に対して、

「十分な意思疎通ができていない。適切に事故対応にあたるため、政府と東京電力が一体となった統合本部を東電本店に設置する」

そう通告している。それは、官邸の東電への不信感から発したものであったことは間違いない。

「逃げてみたって逃げきれないぞ！」

車で東電にやってきた菅首相が、東電本店二階の非常災害対策室に姿を現わしたのは、およそ一時間後の午前五時半を過ぎた頃だった。連日の不眠不休の活動で、誰もが疲労の極にあ

る。だが、司会役を務めた細野補佐官からマイクを受けとった菅は、
「ここにはもうマスコミはいないな？」
そう前置きしてこう話し始めた。有名な、およそ十分にわたる演説である。
「福島原発で起きている状況がどういうことを意味しているかわかっていると思う」
菅はそう切り出した。
「これまで法に基づき、政府にも対策本部を置いていたが、事業者と合同で統合本部を設置することが望ましいと判断した。法的には、首相である私が事業者に対して直接指示できることになっている。本部長は、私、菅だ」
演説は、テレビ会議の映像を通じて、吉田のいる福島第一原発のほかにも、福島第二原発、現地対策本部のある大熊町のオフサイトセンター、柏崎刈羽原子力発電所にも同時中継されている。
この時、総理の演説だけに、多くの人間がメモにペンを走らせている。
「副本部長は、海江田大臣と清水社長だ」
菅がそう言うと、海江田が立ち上がり、礼をした。次第に菅の口調が激しくなる。
「事故の被害は甚大だ。このままでは日本国は滅亡だ。撤退などあり得ない！　命がけでやれ」
テレビ会議映像には、菅のうしろ姿しか映っていない。だが、声はマイクを通じて響きわたっている。左手を左腰のうしろにあて、向き直ったり、さまざまな方向を見ながら、菅はしゃべりつづけた。

言うまでもなく吉田以下、福島第一原発の最前線で闘う面々にも、表情こそ見えないものの、興奮した菅のようすがわかった。
その現場の人間の胸に次の言葉が突き刺さった。
「撤退したら、東電は百パーセントつぶれる。逃げてみたって逃げきれないぞ！」
逃げる？　誰に対して言っているんだ。いったい誰が逃げるというのか。この菅の言葉から、福島第一原発の緊対室の空気が変わった。
（なに言ってんだ、こいつ）
これまで生と死をかけてプラントと格闘してきた人間は、言うまでもなく吉田と共に最後ま

べりつづけた。

言うまでもなく吉田以下、福島第一原発の最前線で闘う面々にも、表情こそ見えないものの、興奮した菅のようすがわかった。

その現場の人間の胸に次の言葉が突き刺さった。

「撤退したら、東電は百パーセントつぶれる。逃げてみたって逃げきれないぞ！」

逃げる？　誰に対して言っているんだ。いったい誰が逃げるというのか。この菅の言葉から、福島第一原発の緊対室の空気が変わった。

（なに言ってんだ、こいつ）

これまで生と死をかけてプラントと格闘してきた人間は、言うまでもなく吉田と共に最後まで現場に残ることを心に決めている。その面々に、「逃げてみたって逃げきれないぞ！」と一国の総理が言い放ったのである。

「現地に足を運び、所長と情報交換してきた。しかし、情報が遅い！　東電の情報は、不正確だし、誤っている。一号機の水素爆発は、テレビが映し出しているにもかかわらず、政府への報告は一時間遅れだ。目の前のことだけでなく、その先を見据えて、当面の手を打て！」

昂揚感だろうか、口調はさらに強くなっていく。

「六十になる幹部連中は現地に行って死んだっていいんだ！　俺も行く。社長も会長も覚悟を決めてやれ！」

テレビ会議を通じて、演説を聞く人間の間にざわめきが広がる。総理大臣として、常軌を逸した言い方だった。

「撤退したら東電は百パーセントつぶれる！」

菅は先に言った言葉をもう一度、繰り返した。そして目の前にいる東電の幹部連中を見まわしながら、こう言った。

「なんでこんなに大勢いるんだ！　大事なことは五、六人で決めるものだ。ふざけるんじゃない！　小部屋を用意しろっ」

最後は、凄まじい口調となった。

本店の非常災害対策室に詰めていた面々は、あまりの首相の剣幕に唖然としていた。いや、それよりも、テレビ画面を通じて、怒声が響き渡った福島第一原発の緊対室は、怒りと虚しさが入り交じった奇妙な雰囲気に陥った。

その時、緊対室の円卓の中央の本部長席にいた吉田は、テレビ会議の映像とカメラの方向に背を向けて、すっくと立ち上がった。

なんだろう？　まわりが吉田を見た瞬間、吉田はズボンを下ろし、パンツを出してシャツを入れなおした。総理に尻を向けて、ズボンを下ろしたのである。

（なに言ってやがる、このバカ野郎）

吉田はそう言いたかったのかもしれない。東工大の先輩でもある総理に対して、現地で死を覚悟した吉田自身も、空虚感と怒りを覚えていた。

「逃げ切れないぞ、というのは、そういう意味ではありません。日本が崩壊するんだから、日本自身が逃げられないっていうことなんです。私にとっては、私自身のことでもある。逃げられないんだから」

菅直人・前首相は、この時のことをそう語った。

「私は、総理大臣として言っているのであって、別に福島の現場の人に対して言っているわけではない。あそこで言ったのは、あくまで、日本が事故収束を諦めたらダメだ、他の国に任せることはできない、つまり、日本人が逃げ切れないってことなんです。誰かが悪いなんて、私は言っていない」

テレビ映像を見る現場の人間を驚かせたその発言について、菅は、そう振り返るのである。

逃げられないっていうことなんです。私にとっては、私自身のことでもある。逃げられないんだから」

菅直人・前首相は、この時のことをそう語った。

「私は、総理大臣として言っているのであって、別に福島の現場の人に対して言っているわけではない。あそこで言ったのは、あくまで、日本が事故収束を諦めたらダメだ、他の国に任せることはできない、つまり、日本人が逃げ切れないってことなんです。誰かが悪いなんて、私は言っていない」

テレビ映像を見る現場の人間を驚かせたその発言について、菅は、そう振り返るのである。

第十七章　死に装束（しょうぞく）

「各班は、最少人数を残して退避！」

「二号機、サプチャンの圧力、ゼロになりましたぁ！」

その声は、緊対室に轟きわたった。声の主は、伊沢郁夫である。伊沢はそのシーンを繰り返し思い出す。「うっ」という声にもならない声がその瞬間、緊対室を包んだのだ。

三月十五日午前六時過ぎ――。

直前に大きな衝撃音が緊対室を包み込んでいた。明らかに〝何か〟が爆発した音だった。

（今度はどこが……？）

緊対室に緊張感が走った瞬間、

「パラメーター、確認しろ！」

吉田所長がそう叫んでいた。

「はい！」

発電班の席にいた伊沢は、ただちに中操に連絡した。二日前の夕方から伊沢たちは数時間ごとに一、二号機の中操に交代で行く態勢に切り替えている。

この時、中操に入っていたのは、平野を筆頭とする運転員たち五人である。平野たちは爆発音が起こってすぐ暗闇の中操で懐中電灯を頼りに、パラメーターの数字をいちいちバッテリーにつないで読み取っていった。その時、サプチャンの圧力が「ゼロ」になっていたのを発見したのである。

「二号機、サプチャンの圧力ゼロ！」

ただちに平野から伊沢に電話連絡が来た。受話器を握ったまま伊沢は、緊対室の隅々まで響

「はい！」

発電班の席にいた伊沢は、ただちに中操に連絡した。二日前の夕方から伊沢たちは数時間ごとに一、二号機の中操に交代で行く態勢に切り替えている。

この時、中操に入っていたのは、平野を筆頭とする運転員たち五人である。平野たちは爆発音が起こってすぐ暗闇の中操で懐中電灯を頼りに、パラメーターの数字をいちいちバッテリーにつないで読み取っていった。その時、サプチャンの圧力が「ゼロ」になっていたのを発見したのである。

「二号機、サプチャンの圧力ゼロ！」

ただちに平野から伊沢に電話連絡が来た。受話器を握ったまま伊沢は、緊対室の隅々まで響きわたる声で叫んだのだ。一号機や三号機で水素爆発が起きていたことから、「もしかしたら二号機も」という思いを持っていたのは確かだ。

ついにこの時が来た。発電班の面々は、誰もが「もうダメかもしれない」と思った。サプチャンとは、サプレッション・チェンバー（suppression chamber）の略で、格納容器の圧力を調節する圧力抑制室のことだ。

炉心の蒸気は、このサプチャンの水の中に吹き込まれて液化される。ここの気密性が揺るがなければ、高濃度の放射線放出は避けられる。だが、その圧力が「ゼロ」になったということは、頼みのサプチャンに「穴があいた」可能性を示している。

のちの検証によれば、ベントが成功しなかった二号機はこの時、なんらかの損傷により、全号機の中で最も多くの放射性物質を〝放出〟したのである。

ついに恐れていた事態が起こったかもしれない――受話器を握りしめたまま伊沢は、いっそう慌ただしくなる緊対室の光景を見つめて、そんなことを考えていた。それからどれほど時間

が経っただろうか。吉田所長の「指示」が飛んだ。
「各班は、最少人数を残して退避！」
大きな声だった。吉田は、ついに各班に必要最低限の人数を残しての「退避」を命じたのである。
緊対室の面々は、直前に菅首相の〝演説〟を聞いている。ここまで言われるのか、とそれぞれが虚脱感に見舞われてから、わずか三十分ほどしか経っていない。命をかけて事態に対処している者たちに、一国の総理が「命がけでやれ！」と言い放ったのである。
その虚脱感がまだ抜け切れない、なんともいえない嫌な空気の中に〝最悪の事態〟が訪れたのである。
「（残るべき）必要な人間は班長が指名すること」
吉田は、さらにそう指示した。指揮官である吉田所長が、ついに「退避」を命じたことに、伊沢はこの時、独特の感情を抱いている。
「吉田さんはある意味、ほっとしているかもしれない」
ふと、伊沢はそう感じたのだ。
「この時点で技術系の人間ではない人たちも含めて免震重要棟には大勢の人（注＝六百人以上）が残っていました。吉田さんは、技術系以外の人は早く退避させたかったと思います。しかし、外の汚染が進んでいましたから免震重要棟から外に出すことができなくなっていたんです。でもこの時、もうそんなことを言っていられない状況が生まれたわけですから、最小限の人間を除いて、二F（福島第二原発）への退避を吉田さんが命じたんです。退避を命じることができたことで、吉田さんがある意味、ほっとしただろうと思ったのは、私自身が当直長として部下たちと一緒に中操に籠もっていて、同じような立場にいたからだと思います」
伊沢は、人の命を左右する立場にある者のつらさに共感を覚えた。
吉田が「退避を命じる」ことができたという事実に、伊沢は、ああよかった、と不思議な感覚に捉われていたのである。それは、地震発生以来、中操でぎりぎりの闘いを展開してきた伊沢だからこその感想だっただろう。

が残っていました。吉田さんは、技術系以外の人は早く退避させたかったと思います。しかし、外の汚染が進んでいましたから免震重要棟から外に出すことができなくなっていたんです。でもこの時、もうそんなことを言っていられない状況が生まれたわけですから、最小限の人間を除いて、二F（福島第二原発）への退避を吉田さんが命じたんです。退避を命じることができたことで、吉田さんがある意味、ほっとしただろうと思ったのは、私自身が当直長として部下たちと一緒に中操に籠もっていて、同じような立場にいたからだと思います」

伊沢は、人の命を左右する立場にある者のつらさに共感を覚えた。

吉田が「退避を命じる」ことができたという事実に、伊沢は、ああよかった、と不思議な感覚に捉われていたのである。それは、地震発生以来、中操でぎりぎりの闘いを展開してきた伊沢だからこその感想だっただろう。

「死に装束に見えた」

必要最小限の人間を除いて退避――その吉田の指令で免震重要棟は、一種の混乱状態に陥った。言うまでもなく「必要最小限の人間」とは、基準のないものである。どこまでが必要で、どこから必要がないのか、曖昧なのだ。慌ただしくなった免震棟では、その基準は多くの場合、「自分自身」の判断に委ねられた。

伊沢は「技術を持った人間以外は退避して欲しい」と思っていた。年齢が若い人間も同じだ。目の前にいる若い人間に、伊沢は声をかけた。

「おまえ、なにしてるんだ。早く出ろ」

「いや、僕は残ります」

「なに言ってるんだ。おまえは若い。出ろ！」

「いやです」

「これは命令だ。早く出ろ」
そんな会話を交わしながら、伊沢は次々と発電班の人間を送り出していった。
「ありがとうございました」
「お世話になりました」
若い人間が伊沢に挨拶して出ていった。目に涙を浮かべて部屋を出ていった者もいる。
しかし、出ていくのは、若い人間だけではなかった。当然残るだろうと思っていたベテランの中にも荷物を持って出ていく者もいた。
生と死の瀬戸際は、どんな時でも残酷だ。覚悟を決めてベントの再チャレンジに行った吉田一弘は、この時、まだ伊沢と共に緊対室にいた。
誰が残って、誰が残らないかは、なるべく見ないようにしていました、と吉田は語る。
「あの時、みんなが出ていく時は、ワーッとすごい混乱になりました。沢山の人が退去して、いなくなるわけですからね。僕は、若い人たちに〝出なさい〟と言っていたほうです。若い人でも〝俺は残ります〟と言った人もいました。彼らは責任感でそう言ったんでしょうけど、心の中では、もう行きたいと思っていたと思うんですよ。やはりまだ若いですからね。こっちが、〝出なさい〟というと、若い人は出ていきました」
生と死が分かれる時のその場面は、吉田は今も思い出したくないという。
「誰が残ったとか、誰がいなくなったとか、できるだけ考えないようにしたのは、それが尾を引くのがいやだったからです。今までつき合ってきて、〝おまえは技術者だ〟って、信頼できると思っていた人間も、バラバラといなくなるので、できるだけそういうことは考えないようにしました。年を取った人も、結構、避難していきましたよ。技術を持ってる人間は残らなきゃいけないと、僕は個人的には思っていました。でも、やっぱり、ほとんどが二F（福島第二原発）の方に避難してしまうと、人間って、心細くなるもんですね……」
吉田は、そうしみじみと振り返った。それは、人として極限ともいうべき修羅場だったかもしれない。人間には、それぞれの家庭や人生がある。同じ職場に、同じようにいても、背負っているものが、それぞれの事情によって違うのである。
多くの人間が、さまざまな事情によって、二Fへの退避を自分自身で決断したのは、「人と

「誰が残ったとか、誰がいなくなったとか、できるだけ考えないようにしたのは、それが尾を引くのがいやだったからです。今までつき合ってきて、〝おまえは技術者だ〟って、信頼できると思っていた人間も、バラバラといなくなるので、できるだけそういうことは考えないようにしました。年を取った人も、結構、避難していきましたよ。技術を持ってる人間は残らなきゃいけないと、僕は個人的には思っていました。でも、やっぱり、ほとんどが二F（福島第二原発）の方に避難してしまうと、人間って、心細くなるもんですね……」

吉田は、そうしみじみと振り返った。それは、人として極限ともいうべき修羅場だったかもしれない。人間には、それぞれの家庭や人生がある。同じ職場に、同じようにいても、背負っているものが、それぞれの事情によって違うのである。

多くの人間が、さまざまな事情によって、二Fへの退避を自分自身で決断したのは、「人として」当然のことだっただろう。

この時、人の流れとは逆に二階の緊対室に駆け上がったのが、防災安全グループにいた佐藤眞理（四九）である。

防災安全グループとは、文字通り、こういう災害の時に、職員の安全や誘導など、さまざまな作業をおこなうためにいる。地震発生の時、まだ揺れがつづいている最中に、緊急放送設備に飛びつき、所内中に響き渡るマイクで「緊急避難！」と叫んだのも、彼女だった。

しかし、天井の化粧板がバリバリと落ちる中で、緊急放送の回線がちぎれ飛び、彼女の放送はそのひと言で終わっている。以来、彼女は、免震重要棟に踏みとどまって、作業員の世話や食事関係から、現場の消防車の燃料補給に至るまで多くの活動をおこなった。免震重要棟には、この時、佐藤のような女性がまだ大勢残っていたのである。

「みんなそれまでに、悲惨な状況になっていました。誰も、お風呂にも入れないし、そもそも水さえなくなっているんですから。しかも、天井とかも落ちて、みんな頭が真っ白になったま

ま、そのままいるわけでしょう。男の人はひげ面で、顔も洗えないんだから、女の人は頭はぺッチャンコだし、お化粧っ気もなく、みんな素顔なんですよ。たまたま白いマスクが手に入ると、ちょうど顔を隠せていいな、ってつけてました。トイレも流れませんからすごいことになっているし、そんな中で、雑魚寝しているわけですから、それはひどい状況でした」

そして、三月十五日の朝に、吉田所長による「退避命令」が出たのである。佐藤は、吉田の命令が出た時に一階にいたため、その声を直接聞いていない。だが、続々と退避する人間が一階に降りてきて、事情を知った。

一階には、外に出るための装備がある。タイベックに全面マスク、そして靴にはビニールのカバーをつけて順番に並ぶのである。

だが、退避する人たちが全員マスクをつけていくと、残って作業をする人間のマスクがなくなってしまう。そうなれば、「現場に近づくこと」ができなくなる。

残る人間のために一部のマスクは隠された。絶対数が足りなくなったため、多くの人の奪い合いとなった。

マスクを確保できない人間は、ハンカチを口にあててバスに飛び乗ったり、駐車場に置いてある通勤用の自家用車に分乗していった。

そんな光景を見ながら、佐藤は、ふと自分と一緒に活動していた若い人間が緊対室にまだ残っているのではないか、と思った。

もし、残っていたら、彼らを死なせるわけにはいかない。佐藤は、そう思って緊対室に駆け上がったのだ。入っていくと、シーンとした中で、吉田たち幹部が円卓に座っていた。

「本当にみんな黙って、吉田所長をはじめ五十名近くの管理職の人が円卓にいましたね。静寂というか、シーンとしていました。それまで緊対の中は、ずっとわさわさしてたのに、印象的な光景でした」

その円卓の向こう、入口から見れば、一番遠くの壁にあるテレビ会議のディスプレイの下に、三人の若者が床に車座になってすわり込んでいるのが見えた。消火班の人間だった。

佐藤は、幹部たちが座る円卓の横を通って、ディスプレイの方に近づいていった。

「もうみんな装備して、下で待ってるよ」

上がったのだ。入っていくと、シーンとした中で、吉田たち幹部が円卓に座っていた。

「本当にみんな黙って、吉田所長をはじめ五十名近くの管理職の人が円卓にいましたね。静寂というか、シーンとしていました。それまで緊対の中は、ずっとわさわさしてたのに、印象的な光景でした」

その円卓の向こう、入口から見れば、一番遠くの壁にあるテレビ会議のディスプレイの下に、三人の若者が床に車座になってすわり込んでいるのが見えた。消火班の人間だった。

佐藤は、幹部たちが座る円卓の横を通って、ディスプレイの方に近づいていった。

「もうみんな装備して、下で待ってるよ」

佐藤は、そう声をかけた。だが、彼らは反応を示さない。

「消火班の人は集まってるから下に行って。みんなバスに乗ってますよ」

もう一度語りかけたが、それでも彼らは立ち上がろうとしなかった。彼らは佐藤に対して何も言葉を発しなかったのだ。

「私、ここに残るということは、本当に死ぬことだと思ってたので、ただ若い人は死なせたくないって思ったんですよね。管理職の方は責任があるから仕方がありませんが、その若い人たちは、ここでむざむざ死ぬのがわかっていて、どうしても置いていけないと思いました。他の人たちはバラバラと免震棟を出ているんだけど、〝ね、下で待っているからね、早く行きましょう〟って言ったけど、動かないんですよ」

三人は残る覚悟を決めていたのだろう。佐藤は、その意志が固いことを知った。

「もうここはダメだと思ってましたから、次に来る時は、本当の復興の時かなという感じでした。私は、『きけ わだつみのこえ』とかを読んだ世代ですから、戦争の時に若い人が特攻で命

を落としていったことを知っています。だから、この若い人たちを絶対に死なせられない、と思ったんですよ」

その時、佐藤は自分でも驚くぐらいの大きな声で叫んでいた。

「あなたたちには、第二、第三の復興があるのよ！」

それは、緊対室中に響く声だった。佐藤は必死だった。そうでも言わなければ、彼らは退避することを拒みつづけるだろう。時間はなかった。

あなたたちは、「復興」に命を尽くしなさい――それは、彼らより年長の佐藤の心からの叫びだった。あたかもあの太平洋戦争下で若き兵士たちに戦後の復興を託すようなものだった。

しかし、佐藤の声は、円卓に座る幹部たちにも同時に聞こえている。復興というのは、彼らの「死」を前提にしたものにほかならない。

「円卓にいる幹部たちは、もう死ぬ覚悟をしていたと思うし、実際に、私は、彼らは最後まで残るべきだと思っていました。申し訳ないとは思いましたが、私は心の中で本当に若い人には、復興でやるべきことをやって欲しいと思ったんです。幹部の方たちは、もう死ぬのは仕方ないと思いました。そういう気持ちで皆さんを見たので、吉田所長たちが死に装束をまとっているように見えました」

やっと、三人は立ち上がった。佐藤の気合いが、彼らを動かしたのだ。彼らを連れて出る時、佐藤は、自分の上司である防災安全の部長に声をかけた。そのことを佐藤は、今でも後悔している。

「私、〝部長も一緒に行きませんか〟と思わず、言ってしまったんです。覚悟をして残ろうとしている部長にどうしてあんな声をかけてしまったんだろう、と今も思います。部長は、うーん、と返事に困りました。幹部たちが全員残るのに、うちの部長だけが出るわけにはいかないことを知っているのに、私は余計なことを言ってしまったと思ったんです」

そのすべてを吉田所長は、見ていた。それは実に穏やかな表情だったという。

「吉田所長は、私たちの方を穏やかな顔で見ていました。あの方は、とっくに覚悟を決めておられたと思います。吉田さんはいつも端然として座ってるんですよ。そわそわなんかしないです。黙ってこうやって座ってるんです。私は、皆さんと会うのはこれで最後だと思っていまし

時、佐藤は、自分の上司である防災安全の部長に声をかけた。そのことを佐藤は、今でも後悔している。

「私、〝部長も一緒に行きませんか〟と思わず、言ってしまったんです。覚悟をして残ろうとしている部長にどうしてあんな声をかけてしまったんだろう、と今も思います。部長は、うーん、と返事に困りました。幹部たちが全員残るのに、うちの部長だけが出るわけにはいかないことを知っているのに、私は余計なことを言ってしまったと思ったんです」

そのすべてを吉田所長は、見ていた。それは実に穏やかな表情だったという。

「吉田所長は、私たちの方を穏やかな顔で見ていました。あの方は、とっくに覚悟を決めておられたと思います。吉田さんはいつも端然として座ってるんですよ。そわそわなんかしないです。黙ってこうやって座ってるんです。私は、皆さんと会うのはこれで最後だと思っていましたから、吉田所長だけでなく、全員に向かって礼をして緊対室を出たんです」

深く礼をした佐藤は、もう振り返らなかった。

「私は、振り返りませんでした。神聖な雰囲気ですから、その円卓に座っている五十人ほどは、もう死に装束で腹を切ろうとしてる人たちですから、振り返るなんて、そんな失礼なことはできませんでした。私らみたいな雑兵はやっぱり、そそくさと出るだけです。本当に緊対室はシーンとしていましたから……」

会うのは、これが最後――復旧にかかわる技術系の人間を除いたほかの人間が退避する中で最後に部屋を出て行った佐藤眞理は、そう語った。

残るべき者が残った

緊対室は、シーンとなった。それまでの喧噪が嘘のような静謐な空間となった。だが、不思

議に悲壮感はなかった。
伊沢はこの時、残るべきメンバーが「残ったのだ」と思った。
「私がみんなを送り出したあと、振り返ったら、発電班はいっぱい残ってたんですよ。えっ、と思いました。発電班は、技術を持っていますから、残らなければならない人は多かったですが、それでも、二十五人ほど残っていた。びっくりしてしまいました」
その時の静けさが伊沢は、脳裡から離れない。
「みんなが、ウワーって避難して、出尽くしたじゃないですか。そのあとって、残るべき者が残って、終わった時は、すごく静かでしたよ。シーンとした中で残った者がお互いの顔を見ました。いや、悲壮感じゃないですよ。笑顔って言ったらあれだけど、なんて言うか独特の雰囲気でした」
その時、黙っていた吉田所長が静寂を打ち破るように、こう言った。
「なんか……食べるか?」
それは、事態の深刻さとあまりにかけ離れた言葉だった。
死をいやでも意識せざるを得ない緊張の空気が、このひと言で一瞬にしてやわらいだ。これこそが吉田の吉田たる所以かもしれない。
吉田のひと言で、それぞれがごそごそと食べ物を探し始めた。
「なんか食べるもんねえかなあ」
「あった、あった、あった」
「ほら、ほい、ほい、ほい」

せんべいやクラッカーなどが、いろんな場所から出てきた。そして、各々がそれらを配り始めたのだ。
「なんか食べるかって、吉田さんが言った時、あっ、俺とおんなじこと言ってる、と思ったんですよ」
伊沢は、そう笑った。
「中操にこもって、シーンとなった時に、私も同じことを言ったことがあるんですよ。なんか、雰囲気を変えるというか……。吉田さんが言った時、みんな、〝うおっとお〟って、そん

「あった　あった　あった」
「ほら、ほい、ほい、ほい」

せんべいやクラッカーなどが、いろんな場所から出てきた。そして、各々がそれらを配り始めたのだ。
「なんか食べるかって、吉田さんが言った時、あっ、俺とおんなじこと言ってる、と思ったんですよ」
伊沢は、そう笑った。
「中操にこもって、シーンとなった時に、私も同じことを言ったことがあるんですよ。なんか、雰囲気を変えるというか……。吉田さんが言った時、みんな、〝うおっとお〟って、そんな感じになりましたね。みんなで、あっちこっち、机とかいろいろゴソゴソ探しましたよ。非常食しかないんですけどね。飲み物は、残っていたペットボトルの水だったですね」
探しているうちに、誰かがヨウ素剤を見つけた。
「あっ、ヨウ素剤がありました」
そんな声が飛んだかと思うと、ヨウ素剤も食べ物と一緒に配られた。
「ほいっ、ほいって。何でもいいんですよ。爽やかでしたよ。みんなぐっと覚悟決めたっていう感じでしたからね。残って、シーンとなった時に、本店と喋ってるわけでもなし、ほんとに、発電所単独になった感じでね。おまえもか、みたいに、冗談言いながら、結構明るかったと思います。この後、私たちは、また中操に行くんですけど、もう、覚悟決めた人間ですから、行くのはどうということはなかったです。それより、こいつまで殺しちゃうのか、と心配しなくちゃいけない人間はみんないなくなって、〝死んでいい人間〟だけになりましたから。悲壮感っていうよりも、どこか爽やかな感じがありました」

しかし、吉田を筆頭に緊対室の面々は、あきらめたわけではなかった。むしろ〝身軽〟になった分、さらに闘志が湧いてきたのかもしれない。それは、「新たな闘いの始まり」だったのである。

「やることは決まっているんですよね。プラントのデータをとる、そこは当直の仕事で、原子炉に水を入れるのは、消火班と復旧班の仕事です。あとは電源復旧と、消防車の燃料補給もありましたね。それをずうっと継続したら、とりあえず悪くはならない。だから、あの状況のなかで、また現場に行くんですよ。死ぬと思って残ってるわけじゃなくて、われわれは、やることがあるから残ってるわけですから」

すでに、身体はぼろぼろになっていた。免震重要棟のトイレは、真っ赤になっていた、と伊沢は言う。

「トイレは水も出ないから悲惨ですよ。流すこともできませんからね。みんなして仮設のトイレを運んできて、それが一杯になったら、また次の仮設トイレを組み立てながらやってましたけど、とにかく真っ赤でしたよ。みんな、血尿なんです。あとで、三月下旬になって、水が出るようになっても、小便器自体は、ずっと真っ赤でした、誰もが疲労の極にありましたからね」

およそ六百人が退避して、免震重要棟に残ったのは「六十九人」だった。海外メディアによって、のちに〝フクシマ・フィフティ〟と呼ばれた彼らは、そんな過酷な環境の中で、目の前にある「やらなければならないこと」に黙々と立ち向かった。

門田隆将（かどた　りゅうしょう）

1958（昭和33）年、高知県生まれ。中央大学法学部卒。雑誌メディアを中心に、政治、経済、司法、事件、歴史、スポーツなどの幅広いジャンルで活躍している。著書に『なぜ君は絶望と闘えたのか―本村洋の3300日』（新潮文庫）、『あの一瞬　アスリートはなぜ「奇跡」を起こすのか』（新潮社）、『甲子園への遺言』（講談社文庫）、『神宮の奇跡』（講談社）、『康子十九歳　戦渦の日記』（文藝春秋）、『甲子園の奇跡　斎藤佑樹と早実百年物語』（講談社文庫）、『尾根のかなたに　父と息子の日航機墜落事故』（小学館文庫）、『太平洋戦争　最後の証言（第1部～第3部）』（小学館）などがある。『この命、義に捧ぐ　台湾を救った陸軍中将根本博の奇跡』（集英社）で、第19回山本七平賞受賞。

死の淵を見た男

吉田昌郎と福島第一原発の五〇〇日

2012年12月4日　第1版第1刷発行
2013年8月6日　第1版第8刷発行

著　者　門田隆将

発行者　小林成彦

発行所　株式会社PHP研究所

東京本部　〒102-8331　千代田区一番町21
書籍第一部　☎03-3239-6221（編集）
普及一部　☎03-3239-6233（販売）
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/

装　幀　緒方修一

組　版　有限会社エヴリ・シンク

印刷所
製本所　凸版印刷株式会社

© Ryusho Kadota 2012 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合は弊社制作管理部（☎03-3239-6226）へご連絡ください。
送料弊社負担にてお取り替えいたします。

ISBN978-4-569-80835-2

9784569808352

1920095017006

ISBN978-4-569-80835-2

C0095 ¥1700E

PHP研究所
定価:本体1,700円(税別)

日本はその時、「三分割」されるところだった。

「その時、もう完全にダメだと思ったんですよ。椅子に座っていられなくてね。椅子をどけて、机の下で、座禅じゃないけど、胡坐をかいて机に背を向けて座ったんです。終わりだっていうか、あとはもう、それこそ神様、仏様に任せるしかねぇってというのがあってね」

それは、吉田にとって極限の場面だった。こいつなら一緒に死んでくれる、こいつも死んでくれるだろう、とそれぞれの顔を吉田は思い浮かべていた。「死」という言葉が何度も吉田の口から出た。それは、「日本」を守るために闘う男のぎりぎりの姿だった。

(本文より)

吉田昌郎、菅直人、班目春樹……
当事者たちが赤裸々に語った

「原子力事故」驚愕の真実。